

人と人をつなぐ・・・

F U R E

サテライト新聞



2016年7月発行 第5号

FURE
イメージキャラめばえちゃん

発行

福島大学うつくしまふくしま未来支援センター (FURE)
相双地域支援サテライト

TEL 0240 (23) 6675
HP http://ifs.fure.fukushima-u.ac.jp/



まなび館で布ぞうり作りを体験する町民たち

町民の心の復興と帰還へ向けて

地域文化交流拠点「櫛葉まなび館」が開館

櫛葉南小校舎を利活用 子どもから大人が幅広く集う施設に

住民が生涯学習を楽しみ、交流を深めることができる。櫛葉町地域文化交流拠点「櫛葉まなび館」が7月7日、開館した。同館は櫛葉南小の校舎を利用している。木のぬくもりがあふれる室内では、和布細工や布ぞうり作りが体験できるなど、子どもから大人まで幅広く利用し、心の復興や帰還につながる事が期待される。櫛葉町では来年4月、町内での小中学校の再開を決めているが、小学校は改築した

中学校の校舎での授業となる。多くの「櫛葉っ子」が通学していた学び舎(や)の利活用の検討が進められてきた。さらに、避難指示解除後のコミュニティの再構築も課題となっている中で、芸術や歴史、文化、スポーツ、レクリエーション、ボランティアなど町民の多彩な活動を支え、町民同士の交流を図る場として新たに設けられた。7日には開設記念式典を実施。松本幸英町

長があいさつ、テープカットが行われ、参加者が施設内を見学した。2階建ての校舎の1階部分は、布ぞうりや和布細工作りを楽しむ団体などが入る4つの文化活動スペース、学習室のほか、町立図書館、歴史資料館の分室も開設。2階には、事業所が利用できる事業活動スペースや多目的ホールがある。今後、さまざまな生涯学習や地域学習のプログラムが検討され、

多くの人が参加できる機会を提供する。また、8月18、19の両日には、当サテライトの主催、NPO法人日本ポータル協会小名浜支部、キッズハウスなどの協力で、小・中学生の学習指導を行う夏休みサマージョブを開催することが決まっている。利用には、申請などが必要な場合がある。詳しい問い合わせは町教委教育総務課☎電話0240(26)0808まで。

JICAの中央アジア研修生 川内村を訪問

ウズベキスタンなどから14人
村内見学、副村長講話を聞く

JICA 国際協力機構)の研修 中央アジア・コーカサス地域総合防災行政「コース」の参加者が7月12日、川内村を訪れ、猪狩副村長の講話を聞くとともに、村内を見学し、知見を得た。同研修は、開発途

国で必要な分野での日本の経験や技術を理解する機会を提供することで、将来の国づくりを担う人材の育成に協力しようというもの。同コースでは災害被害を受けた地域などを巡り、それぞれの国の防災・減災上の現状と課題を分析し、自国でのアクションプランを作成し、組織としての防災能力を向上させることを目的にしている。研修には、ウズベキスタンやカザフスタンなど6か国の防災・減災に関係する中央省庁などに勤務する14人が参加し、6月20日から7月30

日の日程で日本に滞在。川内村のほか、兵庫県や広島県などを訪問、日本の防災行政を理解するとともに、自国への応用を考えた。福島市から川内村に入った一行は、牛淵仮置き場で山積みになったフレコンバグや、上川内字大平地内の醸造用ブドウ栽培の畑を見学。コーカサス地方は世界最古のワインの産地と言われていることもあり、興味深く見入っていた。村役場での猪狩副村長の講話では、帰還の意思決定や復興への取り組みなどを聞いた。チェルノブ



猪狩副村長(右)の講義を聞く研修生たち

イリ原発事故を身近に経験した地域の出身者だけに、震災以前に質問していた。



まなび館内にある歴史資料館分室。昭和時代の懐かしい生活用具の数々が並ぶ

教育の専門家の話を聞き
子育ての悩みを共有

いきいき子育てトーク

ポーター・プログラム第一人者
玉根さんの話と懇談

いきいき子育てトーク
福島大FURE相
双地域支援サテライト
主催、NPO法人日本
ポーター協会小名浜
支部の協力)が13日、
榎葉町のあおぞらこ
も園で行われた。子育
て中の母親たちが集ま

り、子どもの発達を支
援するポーター・プ
ログラムの第一人者で
学習塾キッズハウス
いわき市小名浜)を
主宰する玉根洋子さん
の話を聞くとともに、
参加者同士で子育ての
悩みを共有、交流した。
専門家の話を聞くこ
とで、子育てのポイン
トをつかみ、日々の子
育ての中で抱える課題
を解決するヒントを得
て、役立ててもらおう
と企画。玉根さんの携
わるポーター・プロ
グラムは世界90か国以
上で実践され、子ども

の発達のサポートで大
きな成果を上げてい
る。
玉根さんが、多くの
人に共通する悩みとし
て挙げたのが、わが子
とほかの子どもを比
べ、できないことなど、
発達の遅れを気にする
こと。これに対し、比
べることは仕方がない
が、まずは個性を認め
ること。その子ができ
ることを認め、ほめる
のが大切」と指摘する
とともに、叱る際には
原因となった行動がい
けない理由、なぜ叱る
のかを、子どもの目線

に立ち、平易な言葉で
説明することの重要性
を述べた。
玉根さんの話のあと
は、子育てでイスカ
ッション」と題し、玉
根さん
を囲ん
で参加
者が子
育てに
ついて
語り合
った。
各自が
子育て
で普段
思っ
ている疑



子育てのヒントを分かりやすく伝える玉根さん

問や、伝えたい体験な
どを自由に話し、それ
ぞれが大きな共感を示
してさらに話題が広が
るなど、一体感が生ま
れ、盛り上がりがあった。

営農再開の歩み

榎葉町・上繁岡水田復興会

3・福大教員との懇談

晴耕雨読。晴れの
日には田を耕し、雨
の日には読書を楽し
むように、悠々自適、
心穏やかに暮らす様
を指す。上繁岡水田
復興会の面々も、雨
の日は作業を休む。
榎葉に戻った会員も
いけば、避難先から
通う会員もいること
で、外での作業に利
が少ない雨の日は皆
が顔を揃えるわけ
はない。単純に晴耕
雨読を思い出してし
まうのは、はばから
れる思いだ。

梅雨の空模様を見
ながら、作業する佐
藤充男代表たち。そ
んな最中の6月のあ
る日、福島大から、
青柳齊教授、荒井聡
教授、小松知未特任
准教授、棚橋知春特
任研究員の4人が、
佐藤代表らの元を訪
れて懇談し、現状や
展望を語った。

このうち、小松准
教授は町の農業再開
プロジェクトチーム
の委員を務める。こ
れまでも、放射能
被害と正面から向き

合い、自分で道を切
り開こうと歩む農家
に寄り添う活動を行
っている。小松准教
授が中心となって、
佐藤代表らの声を聞
き取った。
これまでの活動を
振り返るなど、取り
組みを話す会員た
ち。最初は何を聞か
れるのかと構えた面
持ちだったが、次第
に熱を帯び、現状の
不安を口にしたり、
ためらうことなく質
問していた。このひ
と時が、今後の営農
へつながっていくこ
とを期待したい。

本格的な夏が近づ
き、土手の草刈りに
四苦八苦し、鳥獣対



話をする佐藤代表(左端)と聞き取る小松特任准教授(右端)

策にも一段と力を入
れる時期になってき
た。三人寄れば文殊
の知恵のごとく、仲
間たちがいる。長年
の経験も、腕もある。
だが、心配、苦労は
やはり、晴
耕雨読、とはいかな
い毎日なのだろう。

編集 雑記

拡大版

こちらがお手元に届
くのは、梅雨が明け
て本格的な夏が到来
している頃。夏の風
物詩、全国高校野球
選手権大会が甲子園
球場で幕を開け、球
児たちの夏は真っ盛
りのことでしょう▼
各地区予選を前に行
われたのが、かつて
の高校球児たちによ
る マスターズ甲子

園」の予選。本県で
は21校のOBチーム
が出場し、その中に
は来春での休校が決
まっている双葉高野
球部OBの姿もあり
ました▼写真は、同
校OBの当サテライ
ト職員が7月2日、
郡山市の開成山球場
で行われた対日大東
北高OBとの試合の
際に撮影したものだ。
昭和48、55年、平成
6年の計3回、夏の
甲子園出場を果たし
た雄姿を胸に、多く
のOBが見守りまし
た。惜しくも敗退
しましたが、同じ球場
で行われた全国高校

野球選手権福島大
会。OBの試合から
1週間後の同9日、
現役双葉高野球部員
2人が加わる3校の
連合チームが、甲子
園の切符を目指して
安達高と対戦。伝統
を引き継ぐべく頑張
った生徒たちです
が、破れてしまいま
した▼双方ともに、
出場を逃したのは残
念ですが、努力から
減ずるものは何もな
いはずではないでし
ょうか。全力を出し
切って、正々堂々と
戦い抜く姿、流す涙
には、胸を打つもの
があります。出場さ
れた皆さん、本当に
お疲れさまでした▼
甲子園での熱戦が真
っ只中の頃、花を咲
かせるのが稲。今回
もご紹介している榎
葉町上繁岡の農家の
皆さんが植えた稲
も、すくすくと生長
しています。稲穂の
あの甘い香りをこの
町で楽しめる日を心
から期待しています
が、その陰には、農
家の皆さんのたゆま
ぬ努力があります。
これからは、さら
に気が抜けない日が続
きます。今年は酷暑
との予報ですが、無
事に収穫へ至るよう
願いを込めて、また
来月もお伝えしま



願い込めて、また
来月もお伝えしま